

医林歌壇



80年代

東京 小松安彦

木星をタバコ見て振り向けば東の空に昇る満月

「木星」を聴きて迎くる元旦の朝食までは起きてもいられず
冬の星田と火星の光をりゼロ年代の終りたる夜に

バレーナの後ろに映る絵画をば今一度見る機会のあれな
「ラトシキ行進曲」を聴ねながらワーノンの街を回想しをり

母のかげ

鶴森 朝霧 朝光

おひくもに初日はみえずあしたには光の見るや國のゆくえも

立ち止まりしきり眺む釜臥山の傍へに燃ゆる夕やけ空に

胸ふかく思いをひとつまたひとつ煙にいはして今日の風すがし
生かされて生きてこゝ生をひき生きるつねつれに思つ駄。正月に

風の匂ひ水の匂ひをかぎて仕つ里の木橋に母のかげあい

九十歳

神奈川 助川 信彦

一白水星九十一歳何事も天命として受け入れ生きむ
責空に白雲 一丘動かざる元日にして物の音なし

ひそかなる老人ホームの一室にこもりて賀状の返信を書く
未「人が子の就職を喜びへるに故人の喜びを」としるす
慢性の心臓病にて双足に地腫れあり天命としても嬉しくあひば

漓江下り（桂林）

千葉 蒲谷玲子

大腿骨折

神奈川 武井忠夫

あいがれし桂林の山の連なりを今こゝに見る言葉は要らず
中国人のシャー客らも乗り合ひて何處も同じ観光地なる

漓江のほとり少数民族住むところ川辺に牛を洗う男あり

桃源郷と名乗る公園入口に時ならぬ桃の造花咲き満つ

果でもなく漓江の流れゆく彼方山の端よりあかき虹の立つ見ゆ

走り抜けし自転車避けんと道の端に自転車ことに倒れこみたの
片手杖で支え来し脚強打してし線に著るき骨折の徵

大脛の骨折なりし人事と聞き流せる身の計らひる難

八十余年の生涯にして駄^{ため}しなく人院ベッドに新春迎つ

心鎮めて讀書・音楽に好^おねばやといひはしなくもかなづれたる

サンフランシスコ

東京 初芝 澄雄

フランソア

東京 横田 英夫

一年振り左手に見る海岸みジャンボ機は軽くシスコの街に
静々とケーブルカーは上りゆく坂の街路に懐かしく立つ
青き海フェリー進みぬ波高くサウサーイーの岸を回摺して
子孫とハイタワーと共に立ちシスコの町を飽かず見下す
波濤分け進む航跡負うが」とカモメ群れ飛ぶシスコの湾に

グラハム・ゴルフ

茨城 羽生 藤伍

百日臨^{ひゃくじつりん}グラハム・ゴルフの間中湖畔の枕に一羽動がす

グラハムの物語へなつた筋^{すじ}あむせ十巻に非ず風跡などと

「トラス^{トラス}」^{トラン}グラハム・ゴルフ体育会を女も楽しむ毎日のこと

西風吹けば波立^{たて}く騒^{さわ}ぎ東風吹けど湖穏やかは流れの故^{ゆゑ}か

霞ヶ浦南の丘山^{こぶ}が漂ひて廢墟の町も活性化せり

鉄工場才詠

東京 林 宏国

幅広き鋼板落す音ひびく工場内の人々の小それ

赤々と焰^{ほのめ}に染まる鋼鉄に顔ほてらせて眼を凝らすなり

鉄工場熱着騒音父々のなかに疲労の速度増すらむ

一時間」と交代に凝視するのみの仕事の辛さを想ふ

工場内火氣嚴禁の表示ある休憩室に灰皿のひと

次は春季号 締め切り 3月26日(金)

医家隨想 今年の冬は冷えますね。新年度第1号を

春らしい楽しい隨想や紀行文などを期待しています。
医芸俳壇・歌壇・柳壇もお忘れなく。

評論 新政権の医療問題への取り組みについての注文や希望、新型インフル問題などご意見があれば。

ご注意 規定を超える原稿量やカラー写真には、相応の負担金を請求させて頂きます。

前記^(文芸特集号)の訂正 小南先生の原稿と紹介記事 本文58頁 下段4行目 永六助氏 永六輔氏 執筆者一覧 お名前の下 併記 丁子 丁字 同專門科目 (口腔外科 補綴・歯科技工)

夕暮る四条小橋の「フランソア」わが青春の思へ出の店
戦前の面影殘る「フランソア」煎茶喫茶のその前に立つ
白壁のままのたどりまつ七十年経てドア押して見る
店内は広く明るく、「コーアル若き女性の憩の場」と
目を閉じて「新世界」等聞せいたる弊衣破帽の若き口傳ふ